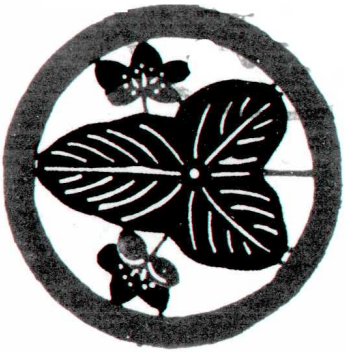
雪の炎

永井路子

雪の炎



永井路子

毎日新聞社

著者略歴

大正14年3月31日東京生まれ。東京女子大国文科卒業。昭和27年，サンデー毎日の懸賞小説に入選。その後文筆業に入る。『炎環』で第52回直木賞受賞。著書『絵巻』『北條政子』『朱なる十字架』『新今昔物語』『王者の妻』ほかがある。

雪の炎

定価 六〇〇円

昭和四十七年二月十日 印刷
昭和四十七年二月二十日 発行

著者 永井路子

編集人 浜田琉司

発行人 朝居正彦

発行所 毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋
〒530 大阪市北区堂島上
〒802 北九州市小倉区紺屋町
〒450 名古屋市中村区堀内町

印刷 共同印刷

製本 佐久間製本

<検印省略> © Michiko Nagai 1972 0093-400051-7904

目次

雪の炎……三
卯三次のウ……三五
春の狂気……七一
からくり紅花……一〇五
わいろ……一四七
竜華寺みち……一八三
眠れる美女……二三五

装

幀

川

田

幹

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

雪(ゆき)の炎(ほのお)

一

みぞれは夜になって雪にかわった。ぽたっぽたっと音のしそうなぼたん雪が、思いがけない厚さにつもって凍りついた夜ふけ、湯殿から火が出た。

寝入りばなだったせいもあって、かえって発見がおくれ、その上、つもった雪に足をとられて水が間にあわず、みるまに土蔵造りの加賀屋の大屋根は光炎を背負った。その間もぼたん雪はふりやまず、そのひとひらひとひらが、炎の中ではかえって黒く浮きあがって、まるで絵のようだった——とは無責任な野次馬のうわさ話である。

が、そんなのんきなうわさの出るくらい、加賀屋の火事は騒ぎほどもなくおさまった。火は湯殿の一画をなめただけで、母屋や店は火の粉をかぶりはしたが、まったく無事だったらしい。これというのも思いのほか火消しの手がそろったからで、向いの小倉屋などは手代、番頭

が総出でかけつけ、雪のなかをすべりながら消火にあたったようだ。
それなのに唐変木の加賀屋の主人六兵衛は、
「いらんお世話だった」
と苦りきっているという。
加賀屋と小倉屋は、同じ呉服屋仲間で商売敵である。
「でもああいうときは別だ、と小倉屋は言ったそうだよ。それを、とんだおせっかいをしてくれたって、加賀屋め、礼もろくすっぽ言わねえそうだぜ」
「俺ンちの土蔵は、ちっとやそっとの火事じゃあ、びくともしねえ。それをごたごたおしかけて来やがって、多分商売ものに水をひっかけて、だめにしちまおうって魂胆じゃなかったか、だとさ」
「ひどいねえ、それは――」
火事を境に加賀屋と小倉屋の角つきあいは、さらに激しくなったようである。
ちょうど暮のかきいれどきでもあったから、負けずぎらいの加賀屋六兵衛は、一日休んだだけで、もう翌日は、何事もなかったように店を開いた。
もっともそれには、わけがあった。ちょうどこのとき、城主小笠原越前守の息女、縫姫と、徳川の流れをくむ隣藩の世子、松平靱負との縁組がととのって、いよいよ婚礼の支度が始まろうというときだったからだ。

ここで弱味を見せれば、御用命はごっそり小倉屋にもって行かれてしまうかもしれない。是が非でも、ひとふんばりしなければならないところである。多分主人から申し渡されたのだろう、加賀屋では店を開けたその日から、番頭、手代、小僧までが、火事のカの字もなかったような顔つきでくるくる働き、

「このたびは、災難だったねえ」

客が見舞でも言おうものなら、

「いや、なに、ちょっとした粗相火でございまして……」

そのことにふれられるのも迷惑というふうに首をふるのであった。

火事から半月ほどしてから、加賀屋でおみのという若い女中が死んだ。ふとした風邪で寝こんだと思ったら、あっけなく死んでしまったとかで、身よりもないらしく、ひっそりと寺に送られた。

何しろ雇人の多い家だし、奥の下働きの女中の顔など覚えているものはほとんどいない。せいぜい出入りの酒屋や魚屋が、

「そういえば、火事のあとから、おみのちゃん、顔をみせませんでしたね」

気がついてそういったくらいのものだ。

「ちょっとかわいい子だったな。あれで十八、九だったかねえ」

「おっそろしく無口な子だったよなあ。でも働きものだったねえ。年中雑巾を手から離したこ

とがなかったみたいだ」
「よく敷居や格子をふいてたねえ」
下り眉でうけ口の、唇のあたりがふっくらしていて、ふつうにしていても、ちょっとべそをかいているようにみえる。若死するだけあって、影の薄い子だった、と出入りの若い者たちはうわさした。
「じゃあ、あの火事さわぎで体でもこわしたんですかい」
が、当の加賀屋の雇人たちは、
「ああ、まあね……」
といたって素気ない。雇人仲間というのは、自分の利害に関係のない人間については薄情なもので、死んでしまったおみのなどには用はない、というところらしい。
だいたい加賀屋の気風がそうなのだ。主人の六兵衛は、どこからか流れて来て、腕一本で強引に身代を作りあげた人間で、それだけに人使いもあらく、無駄話などしていれば、すぐどやしつけられた。おかげで儲けにならないことには口もきくな、という勘定高さは雇人の間にもしみこんでいるらしく、一月もたたないうちに早死したおみののことなどまったく忘れられたかたちになった。
いや、それに、そのころ加賀屋の人が心を奪われていることが別にあった。主人六兵衛の催すひそかな茶会が目前に迫っていたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日ごろ儲け本位の六兵衛にしては、これは珍しいことだった。まったくその心得がないわけではなかったが、

「茶の湯なんどは無用の長物。ありゃ馬鹿のやることよ。身代かぎりをしようというような大馬鹿のな」

こういっていたのに、急にこのごろになってから、改めて、けいこをやりなおしたりして大さわぎをしている。じつは、これには、わけがあった。六兵衛が急に宗旨がえして茶の湯に凝りはじめたのは、ある客をよびたいからだった。

その客の名は、笹尾重次郎——藩公の御気に入りの用人で、いまの藩の奥向きを一手に握っているといってもいい。今度の縫姫の縁談をまとめあげたのも、実は彼の手腕によるもので、婚礼一切の采配をまかされているらしい。

これに六兵衛は目をつけた。きけば重次郎はなかなかの茶人で、書画骨董にも、くわしいらしい。そこで彼にとりいるには、これよりほかはないと思案し、内密で茶会によぶところまで漕ぎつけたのだ。ふつうだったら御用人、笹尾重次郎が六兵衛ふぜいの家にわざわざやってくるはずはない。

「そこが、それ、茶の効用よ、してみると、なかなか茶の湯も棄てたものではないな」

どうやら六兵衛は自分の作戦がうまく行きそうなので、上きげんである。

茶会の前々日にまた雪が降った。

「これはあいにくな。せっかく手入れした庭が雪の下になってしまうとは……。が、まあ、それも風情があってよいかもしれぬ」
六兵衛はそわそわと準備にかかったようだった。
異変の起ったのは、それからまもなくである。
いや、別に目立った事件が起きたわけではない。突然、奥の座敷から、
「惣助！」
番頭をよびつける、度を失った六兵衛の声がきこえ、それを境に、加賀屋の空気はすうっと変わってしまったのだ。
番頭の惣助は、慌しく奥座敷と蔵の間を二三度往復した。女中頭も奥へよばれたなり、帰って来ない。
——なにか起きたな。
気むずかしやの主人の顔色を読むのになれている雇人たちは、首をすくめ、
——うっかり近づけないぞ、こいつは。
大事の茶会の前にこの慌てようでは、と顔を見あわせた。
半刻ほどすると、惣助は奥の座敷から出て来たが、雇人たちと目をあわせるのも避けるようにして、草履をつっかけるなり、裏木戸をとびだしていった。

二

「半日のうちに失せものをとりかえすんですかい？」
火鉢の前で辰吉は腕を組んだ。
「さあてねえ、そういうのはお奉行所へ行きなすったほうが手っとりばやいと思うが……」
すると、惣助はあわてて手を振った。
「そ、そりゃあそうなんだが、ちっとそれではまずいわけがあるのさ。だからこそ、こうして親分に頼みに来てるんじゃないか」
親分――といわれて辰吉はほろ苦い顔をした。
――親分なんて言われるがらじゃねえや、もう……。
十手捕縄は四五年前に返してしまったし、やくざ渡世でならして、「はたりの辰」とおそれられたのはさらに昔のことである。だいたい奉行所の手足になるということだって、決して自慢できることではない。お上の御用をつとめるなどというと聞えはいいが、やくざ渡世からみれば、むしろ二股膏薬の、さげすむべき行為で、
「辰もいよいよ焼きがまわったか」
と陰口をたたかれたものだ。

それでも、六万石のこの御城下では、御用聞きはまだ幅がきいた。江戸あたりでは、もうこのころはやくざを岡ッ引、目明かしに使うことは厳禁されていたが、このくらいの小さな町では、けっこう重宝がられ、恐れられもした。

辰吉がその御用聞きもやめる気になったのは、年ごろになりかけた一人娘のおけいを病気で死なせてからだ。今までやって来たことが何もかもいやになり、ふと女房と二人で小さな一ぜん飯屋でも開こうかという気になった。加賀屋は以前から出入りしていた関係で、そのとき二十両ほど出してくれているので、いまさらすげない顔はできない。

が、惣助の持ちこんできた頼みごとは、あまりにも難題である。何でも加賀屋の家宝とかになっている唐のえらい画家の掛軸を、半日以内に探してくれというのだから。

しかもそれは公けにしてはまずいという。何の手がかりもなしに、藪から棒にそんなことを言われても、手のつけようがないではないか……。

と、そのとき、惣助は一膝のり出して声を低めた。

「ただな、辰さん、ひとつだけ手がかりがあるんだ」

「へえ、それは？」

惣助はあたりをうかがう眼になり、やがて辰吉の耳もとへ囁いた。

「小倉屋だよ」

「え？　何ですって」

「あいつらの仕業にきまっている」
「証拠は――？」
いつのまにか昔の御用聞き時代の、押し殺した声になっていた。
「証拠はない」
「……」
妙に肩すかしを食わされた感じで辰吉はむっとした。
「証拠がなくて、なんで小倉屋だと――」
「言えるんだよ、それが。知っての通り、うちとあそこは、前から敵同士だ。あの掛軸のことを知らないはずはない」
「そんなもんですかねえ」
「そりゃそうだ。うちだって、あそこの家の千両箱がどこに置いてあるくらいのことは、ちゃあんと知ってるんだから……」
おそろしいことを言う男だと、一見実直そうな惣助の顔を辰吉はまじまじとみつめなおした。
「だからな、辰さん。もしかすると、小倉屋は、明日その掛軸が要るってことを知ってのうえで、かくしたとは考えられないかね」
そのくせ、

「なんで明日その掛軸がいるんですかい？」
辰吉が聞き直すと、惣助は、
「いや、ちょっと、その……」
妙に言葉をにごすのだった。
「しかしねえ」
辰吉は合点のゆかぬ顔付きである。
「そのくらいのことで、小倉屋がやったときめることは――」
「じゃあ。証拠を言おうか、もうひとつ」
惣助の目がすわって来た。
「一月ほど前に火事があったろ。あのとき、小倉屋は、大勢で火消しにやって来た。よそめには大変な親切に見えるな。が、あのとき、やつらは、店に押しこんで来て、商売物に水をぶっかけてしまおうっていう魂胆だったに違いないのさ。ぴいんと来たから、俺はあの晩、店に行く通路にがんばって、一歩も入れさせやしなかった」
だから今度も、小倉屋のしわざに違いないと彼は言った。そして、やっと、あの掛軸は明後日、さるお客様を呼んで、そのとき引出ものにするつもりだったのだとだけ打明けた。
「何でも唐わたりの名物なんだそうだ。俺にはわからないが、それ、その信長公とか太閤さんがお好みになったようなしろものだというぜ。馬遠（ばえん）とかいう人の長江釣人図（ちょうこうちょうじんず）とかいってな……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com